

平成22年度 病害虫発生予報 第10号

平成23年1月21日
栃木県農業環境指導センター

いちごハダニ類、トマト灰色かび病を適正に防除しましょう！

予想期間 1月下旬～2月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根拠
- ・現在の発生量はやや多い。(+)
 - ・向こう1か月の平均気温は低い見込みで、発生に不適である。(-)
- (3) 対策
- ・発生が見られた場合、下葉かきを行い発生密度を下げ、サンクリスタル乳剤等の気門封鎖系薬剤をスポット散布するか、マイトコーネフロアブル、コロマイト水和剤等を葉裏にもよくかかるように散布する。
 - ・スパイデックス等の天敵農薬を使用する場合は、放飼前に必ず防除を行い発生密度を低下させる。
- (4) 備考
- ・サンクリスタル乳剤は、高温時には薬害を生じることがあるので注意する。
 - ・スパイデックス等を使用している場合は、天敵に影響のある薬剤(コロマイト水和剤等)は使用しない。

2 いちご 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない
- (2) 根拠
- ・現在の発生量は少ない。(-)
 - ・向こう1か月の降水量は少ない見込みである。(-)
 - ・今後、保温等により施設を密閉するため、施設内が多湿となりやすく、発病に好適となる。(+)
- (3) 対策
- ・ハウス内の低温多湿が発生助長要因となるので、下葉を取り除き風通しを良くするとともに、かん水は必要最小限にとどめる。
 - ・発病果実等は伝染源となるので速やかに取り除き、ハウス外で処分する。
 - ・発生初期にフルビカフロアブル、アミスター20フロアブル等を散布する。
 - ・降雨が続いて湿度が高い場合は、ロブラールくん煙剤等の使用も効果的である。

3 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない
- (2) 根拠
- ・現在の発生量はやや少ない。(-)
 - ・向こう1か月の平均気温は低い見込みである。(-～±)
- (3) 対策
- ・軟弱徒長すると発生が多くなるので、適切な温度管理やかん水を行う。
 - ・発生を予防するため、硫黄粒剤によるくん煙を行う。
 - ・発生初期にカリグリーン、ベルコートフロアブル等を葉裏にもよくかかるように散布する。

4 トマト 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根拠
- ・現在の発生量はやや多い。(+)
 - ・向こう1か月の降水量は少ない見込みである。(-)
 - ・今後、保温等により施設を密閉するため、施設内が多湿となりやすく、発病に好適となる。(+)
- (3) 対策
- ・生育に応じて葉かきを実施し、ハウス内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。また、植物体表面の結露は発病を助長するため、循環扇や暖房機等を稼働し、植物体表面の結露を除去する。
 - ・咲き終わった花卉や発病果、発病葉は伝染源となるので速やかに取り除き、ハウス外で処分する。
 - ・防除は予防を基本とし、暖房機を利用したボトキラー水和剤のダクト内投入を行う。また発生初期に、ゲッター水和剤、サンヨール等を散布する。

5 トマト コナジラミ類

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並。(±)
- (3) 対 策 ・向こう1か月の平均気温は低い見込みで、発生に不適である。(-)
・生育に応じて葉かきを実施し、葉裏に寄生した幼虫や蛹を除去する。除去した葉は埋設やビニル袋等で密封し枯死させてから処理する。
・施設内に黄色粘着板を設置し、コナジラミ類を捕殺する。
・粘着くん液剤[適用害虫：タバココナジラミ類]等を定期的に散布し、コナジラミ類を低密度に抑える。
・タバココナジラミは黄化葉巻病を媒介するので、タバココナジラミの発生が見られる場合は、サンマイルフロアブル、クリアザールフロアブル等を散布する。
- (4) 備 考 ・粘着くん液剤の散布後は、過湿を避け薬液が乾くようにする。原則として他剤との混用は避ける。

6 きゅうり アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は多い。(+)
- (3) 対 策 ・向こう1か月の平均気温は低い見込みで、発生に不適である。(-)
・青色粘着トラップを施設内に設置し、アザミウマ類の早期発見に努める。
・発生初期にアーデント水和剤[適用害虫：ミカンキイロアザミウマ]、コテツフロアブル[適用害虫：ミナミキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ]等を散布する。

7 なら 白斑葉枯病

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並。(±)
- (3) 対 策 ・今後、施設を密閉し保温性高めるため、施設内が多湿となりやすく、発病に好適となる。(+)
・ハウス内が多湿にならないよう、日中に適度な換気を行う。
・発生初期に、セイビアーフロアブル20、アミスター20フロアブル等を散布する。

8 その他の病害虫

	現 況	発生予想		現 況	発生予想
いちご	アブラムシ類	平年並	なら	ネダニ	多
	コナジラミ類	やや少	きく	白さび病	平年並
トマト	葉かび病	やや少		アブラムシ類	平年並
	黄化葉巻病	やや多		ハダニ類	平年並
きゅうり	褐斑病	やや多		アザミウマ類	やや多

農薬を上手に使いこなしましょう！

ハウス内で薬剤を散布するときは、午前中のうちに葉裏にも薬剤がよくかかるように散布する。同一薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。薬剤散布については、ミツバチ、マルハナバチに対する安全日数を十分考慮する。

1か月気象予報（予報期間1月15日から2月14日 1月14日気象庁発表）

週別の気温は、1週目は、低い確率が60%です。2週目は、低い確率が50%です。3～4週目は、平年並または低い確率ともに40%です。

	低い(少ない)確率	平年並の確率	高い(多い)確率
気温	60%	30%	10%
降水量	50%	30%	20%
日照時間	20%	30%	50%

NEWS & INFORMATION

植物防疫ニュース(速報 No. 9)「ウンカ類幼虫の生息密度とイネ縞葉枯病の保毒虫率について」を平成23年1月14日に発表しました。

詳しくは農業環境指導センター(<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/>)までお問い合わせください。

当センター携帯サイト(<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/keitai.htm>)もご利用ください。

Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012

平成22年度 病害虫発生予報 第11号

平成23年2月17日
栃木県農業環境指導センター

ハダニ類、灰色かび病等の発生に注意しましょう！

予想期間 2月下旬～3月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 水稲 縞葉枯病(ヒメトビウンカ媒介)

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根拠
- ・ヒメトビウンカの越冬世代幼虫の発生量は多く、県南部の一部では越冬世代の縞葉枯病保毒虫率も高い(平成22年11月時点)。(+)
- (3) 対策
- ・地域の発生状況、発生情報に注意を払う。
 - ・保毒虫率が高い地域で罹病性品種(コシヒカリ、なすひかり等)を作付する場合は、ダントツ箱粒剤[適用害虫：ウンカ類]、アドマイヤー箱粒剤[適用害虫：ウンカ類]またはこれらを含む混合箱施用剤を使用する。
 - ・平成22年度植物防疫ニュース(速報No.9)「ウンカ類幼虫の生息密度とイネ縞葉枯病の保毒虫率について」参照。
- (4) 備考
- ・縞葉枯病抵抗性品種(あさひの夢等)を作付する場合は、チョウ目(イネツトムシ、フタオビコヤガ等)、ツマグロヨコバイに適用のある箱施用剤を選択する。

2 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根拠
- ・現在の発生量はやや多い。(+)
 - ・向こう1か月の平均気温は高い見込みで、増殖に適している。(+)
- (3) 対策
- ・天敵農薬(スパイデックス等)を使用する場合は、放飼前に必ず防除を行い発生密度を低下させる。
 - ・発生が見られた場合、下葉かきを行い発生密度を下げ、サンクリスタル乳剤等の気門封鎖系薬剤をスポット散布するか、スターマイトフロアブル、マイトコーネフロアブル等を葉裏にもよくかかるように丁寧に散布する。
- (4) 備考
- ・サンクリスタル乳剤は、高温時には薬害を生じることがあるので注意する。

3 いちご アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根拠
- ・現在の発生量は平年並。(±)
 - ・向こう1か月の平均気温は高い見込みで、増殖に適している。(+)
- (3) 対策
- ・雑草はアザミウマ類の増殖源になるので、施設内外の除草を行う。
 - ・ベッド上の株の高さの位置に青色粘着トラップを設置し、アザミウマ類の早期発見に努める。
 - ・発生初期から、マッチ乳剤[適用害虫：ミカンキイロアザミウマ]、スピノエース顆粒水和剤等を散布する。
- (4) 備考
- ・アザミウマ類は花の時期に加害することで被害果が発生するので、花の中をよく観察する。

4 トマト 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根拠
- ・現在の発生量はやや多い。(+)
 - ・向こう1か月の降水量は多い見込みで発病に好適となる。(+)
 - ・今後、施設内が多湿となりやすく、発病に好適である。(+)
- (3) 対策
- ・生育に応じて葉かきを実施し、ハウス内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。また、植物体表面の結露は発病を助長するため、循環扇や暖房機等を稼働し、植物体表面の結露を除去する。
 - ・咲き終わった花卉や発病果、発病葉は伝染源となるので速やかに取り除き、ハウス外で処分する。
 - ・防除は予防を基本とし、暖房機を利用したボトキラー水和剤のダクト内投入を行う。また発生初期に、カンタスドライフロアブル、ジャストミート顆粒水和剤等を散布する。

5 トマト コナジラミ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並。(±)
・向こう1か月の平均気温は高い見込みで、増殖に適している。(+)
- (3) 対 策 ・生育に応じて葉かきを実施し、葉裏に寄生した幼虫や蛹を除去する。除去した葉は埋設やビニル袋等で密封し枯死させてから処理する。
・施設内に黄色粘着板を設置し、コナジラミ類を捕殺する。
・粘着くん液剤[適用害虫：タバココナジラミ類]等を定期的に散布し、コナジラミ類を低密度に抑える。
・タバココナジラミは黄化葉巻病を媒介するので、タバココナジラミの発生が見られる場合は、アプロードエースフロアブル、クリアザールフロアブル等を散布する。
- (4) 備 考 ・粘着くん液剤の散布後は、過湿を避け薬液が乾くようにする。原則として他剤との混用は避ける。

6 きく ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は多い。(+)
・向こう1か月の平均気温は高い見込みで、増殖に適している。(+)
- (3) 対 策 ・下葉や葉裏に多く発生するので、その部分に薬剤がよくかかるように散布する。生育初期から防除することでその後の発生密度を抑制できる。
・葉裏をよく観察し、発生が認められたら、粘着くん液剤等気門封鎖系薬剤をスポット散布するか、マイトコーネフロアブル[適用害虫：ナミハダニ]、ダニサラバフロアブル等を散布する。
- (4) 備 考 ・粘着くん液剤の散布後は、過湿を避け薬液が乾くようにする。原則として他剤との混用は避ける。

7 その他の病害虫

		現 況	発生予想			現 況	発生予想
いちご	灰色かび病	平年並	やや多	きゅうり	うどんこ病	やや少	やや少
	うどんこ病	やや少	やや少		アザミウマ類	多	多
	アブラムシ類	多	多		にら	白斑葉枯病	やや少
トマト	うどんこ病	平年並	平年並	ネダニ	多	多	
きゅうり	褐斑病	やや少	平年並	きく	白さび病	少	やや少

春の病害虫防除対策

水稲 イネドロオイムシ

- ・前年発生が多く見られたほ場の周辺では、イネドロオイムシ成虫が多く越冬していると考えられます。成虫は5月下旬に本田への侵入を開始し産卵するため、被害が懸念されるほ場ではイネドロオイムシに適用のある箱施用剤を使用しましょう。
- ・平成22年度植物防疫ニュース(速報No.5)「県中北部でイネドロオイムシ幼虫による被害が拡大しています!」をご覧ください。

いちご親株 ハダニ類

- ・雨よけ施設はハダニ類の発生が多くなるので、定植する親株はハダニ類がついていない株を選び、施設に持ち込まないようにしましょう。また、発生初期に殺ダニ剤を散布して防除しましょう。

1か月気象予報(予報期間2月12日から3月11日 2月11日気象庁発表)

天気は、平年に比べて晴れの日が少ないでしょう。向こう1か月の平均気温及び降水量は、高い(多い)確率50%、日照時間は平年並または少ない確率40%です。週別の気温は、1~2週目は、平年並または高い確率ともに40%、3~4週目は、高い確率40%です。

	低い(少ない)確率	平年並の確率	高い(多い)確率
気温	20%	30%	50%
降水量	20%	30%	50%
日照時間	40%	40%	20%

携帯サイトからも「ご意見・ご質問」が送信できるようになりました。ご活用下さい。

詳しくは農業環境指導センター(<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/>)までお問い合わせください。

当センター携帯サイト(<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/keitai.htm>)もご利用ください。

Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012

平成22年度 病害虫発生予報 第12号

平成23年3月18日
栃木県農業環境指導センター

○トマト灰色かび病が多発しています！

予想期間 3月下旬～4月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
- (2) 根拠
 - ・現在の発生量は平年並。(±)
 - ・日中の換気の際に、開口部が大きく開くようになるため、発病にやや不適となる。(～±)
- (3) 対策
 - ・下葉の葉柄等に発生が多く見られるので、下葉を取り除き、風通しを良くするとともに、かん水は必要最小限にとどめる。
 - ・発病部位は伝染源となるので速やかに取り除き、施設外で処分する。
 - ・発生がみられる場合は、ロブラール500アクア、フルピカフロアブル、アミスター20フロアブル等を散布する。

2 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：**やや多い**
- (2) 根拠
 - ・現在の発生量はやや多い。(＋)
 - ・向こう1カ月の平均気温は平年並の見込みである(±)
- (3) 対策
 - ・発生が見られたら、下葉かきを行い、発生密度を下げ、エコピタ液剤等の気門封鎖系薬剤をスポット散布するか、カネマイトフロアブル、ダニサラバフロアブル等を散布する。
 - ・薬剤散布は、葉裏に十分に薬剤が付着するよう丁寧に行う。

3 いちご アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量：**多い**
- (2) 根拠
 - ・現在の発生量は多い。(＋)
 - ・日中の換気の際に、開口部が大きく開くようになるため、ハウス内への飛び込みが増える可能性がある(＋)
- (3) 対策
 - ・雑草はアザミウマ類の増殖源になるため、施設内外の除草を行う。
 - ・ベッド上の株の高さの位置に青色粘着トラップを設置し、アザミウマ類の早期発見に努める。
 - ・発生初期からカスケード乳剤〔適用害虫：ミカンイロアザミウマ〕、モスピラン水溶剤等を散布する。
- (4) 備考
 - ・アザミウマ類は花に集中して寄生しているため、花の中をよく観察する。

4 トマト 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：**多い**
- (2) 根拠
 - ・現在の発生量は多い。(＋)
 - ・夜温が高くなり、暖房機の稼働時間が減少するため、ハウス内が多湿となりやすい。(＋)
- (3) 対策
 - ・施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。また、循環扇や暖房機等を稼働し、植物体表面の結露を除去する。
 - ・咲き終わった花卉や発病果、発病葉は伝染源となるので早急に取り除き、施設外で処分する。
 - ・発生初期にセイビアーフロアブル20、トータレックス顆粒水和剤等を散布する。

5 トマト コナジラミ類

- (1) 発生予想 発生量：**やや少ない**
- (2) 根拠
 - ・現在の発生量はやや少ない。(－)
 - ・向こう1カ月の平均気温は平年並みの見込みである。(±)
- (3) 対策
 - ・生育に応じて葉かきを実施し、葉裏に寄生した幼虫や蛹を除去する。除去した葉は、ビニル袋等で密封して枯死させてから処分する。
 - ・施設内や施設周辺に黄色粘着トラップを設置し、成虫を捕殺する。
 - ・エコピタ液剤、サンクリスタル乳剤等の気門封鎖系薬剤を定期的に散布し、

低密度に抑える。

- ・発生が見られたほ場では、モスピラン水溶剤、チェス顆粒水和剤等を散布する。

6 なら 白斑葉枯病

- (1) 発生予想 発生量： **やや多い**
- (2) 根 拠
- ・現在の発生量が多い。(+)
・日中に換気が徐々に行われるようになるため、発病にやや不適となる。(－～±)
- (3) 対 策
- ・ハウス内が多湿にならないよう、日中に適度な換気を行う。
・発生初期にストロビーフロアブル、ポリオキシシ AL 水溶剤等を散布する。

7 なし 黒星病

- (1) 発生予想 発生量： **平年並**
- (2) 根 拠
- ・昨年は、なしの生育初期から発生量が多かったが、8月には平年並みに落ち着いた。(±～+)
 - ・向こう1カ月の降水量は少ないまたは平年並みの見込みで、発生にやや不適である。(－～±)
- (3) 対 策
- ・一次伝染時期となるりん片脱落期から開花期は最重要防除時期となる。果そう基部病斑(芽基部病斑)の摘み取りを徹底し、2分咲きから落花直後に治療効果があるDMI (EBI) 剤を散布する。

8 その他の病害虫

		現 況	発生予想			現 況	発生予想	
いちご	うどんこ病	平年並	平年並	きゅうり	アザミウマ類	多	多	
	萎黄病	やや多	平年並		なら	ネダニ類	多	多
	アブラムシ類	やや多	やや多		たまねぎ	黒点葉枯病	多	やや多
トマト	うどんこ病	多	やや多	きく	白さび病	少	少	
	黄化葉巻病	平年並	やや少		ハダニ類	多	多	
きゅうり	褐斑病	やや多	平年並		アザミウマ類	平年並	平年並	

東北地方太平洋沖地震に伴う農作物・施設技術対策について

- ☆ 東北地方太平洋沖地震や、計画停電(輪番停電)に伴う農作物・施設技術対策については、栃木県公式ホームページの緊急情報(平成23年度東北地方太平洋沖地震に関する情報)、もしくはとちぎアグリネットのトピックス(地震に伴う農業技術対策情報)をご覧ください。

栃木県公式ホームページ

URL : <http://www.pref.tochigi.lg.jp/index.html>

とちぎアグリネット

URL : <http://www.agrinet.pref.tochigi.lg.jp/index.cgi>

農薬を適正に使いましょう!

- ☆ ミツバチやマルハナバチに対する安全日数を目安に薬剤を選択する。
- ☆ 同一薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
- ☆ ハウス内で薬剤を散布するときは、午前中のうちに葉裏にも薬剤がよくかかるように散布する。

1か月気象予報(予報期間3月12日から4月11日 3月11日気象庁発表)

天気は数日の周期で変わるでしょう。平年に比べ、晴れの日が多い見込みです。週別の気温は、1週目は平年並の確率が50%です。2週目は、高い確率が50%です。3～4週目は、平年並または低い確率ともに40%です。

	低い(少ない) 確率	平年並の確率	高い(多い) 確率
○気温	30%	40%	30%
○降水量	40%	40%	20%
○日照時間	20%	40%	40%

NEWS & INFORMATION

- ☆ 「平成23年度 農作物等病害虫雑草防除の手引」は4月上旬に発行されます。お求めの方は、(社)栃木県植物防疫協会(028-683-5533)にお問い合わせ下さい。

携帯サイトからも「ご意見・ご質問」が送信できます。

詳しくは農業環境指導センター(<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/>)までお問い合わせください。

当センター携帯サイト(<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/keitai.htm>)もご利用ください。

Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012

平成23年度 病害虫発生予報 第1号

平成23年4月22日
栃木県農業環境指導センター

ハダニ類、アザミウマ類が増加しているので防除を適切に行いましょう。

予想期間 4月下旬～5月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 麦類 赤かび病

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない
- (2) 根拠 ・向こう1か月の平均気温は平年並～低く、降水量は少ない見込みで、発生に適していない。(-)
- (3) 対策 ・二条大麦は穂ぞろい期7～10日後、六条大麦は開花始めと開花10日後、小麦は開花始めと開花10～20日後に防除を行う。
・登熟期の連続した降雨・曇天や不稔粒の発生が見られる場合は多発の恐れがあるので、追加防除を行う。
- (4) 備考 ・平成23年度植物防疫ニュース(速報No.1)「麦類赤かび病は適期に防除しましょう」を平成23年4月5日に発表。

2 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：平年並
- (2) 根拠 ・現在の発生量はやや少ない。(-)
・向こう1か月の平均気温は平年並～低い見込みで、発生にやや適している。(+)
- (3) 対策 ・軟弱徒長すると発生が多くなるので、適切な温度管理やかん水を行う。
・発生初期にアフェットフロアブル、ベルコートフロアブル等を葉裏にもよくかかるように散布する。
- (4) 備考 ・親株床に病気を持ち込まないように本ぼの管理作業とは別に作業を行う。

3 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根拠 ・現在の発生量はやや多い。(+)
・向こう1ヶ月の降水量は少なく日照時間は多い見込みで、発生に適している。(+)
- (3) 対策 ・発生密度が高くなると防除が困難になるので、発生初期に気門封鎖系薬剤をスポット散布してハダニ類を低密度に抑える。
・下葉かき作業後にアフーム乳剤、マイトコーネフロアブル等を葉裏によくかかるように散布する。
- (4) 備考 ・アフーム乳剤のミツバチへの安全日数は2日である。
・雨よけ施設のいちご親株床では、ハダニ類の発生が多くなるので注意する。
・親株床にハダニ類を持ち込まないように本ぼの管理作業とは別に作業を行う。
・親株床に発生がみられる場合はランナー発生が多くなる前に、ハダニ類の初期防除を行う。

4 いちご、きゅうり アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根拠 ・現在の発生量は多い。(+)
・向こう1ヶ月の降水量は少なく日照時間は多い見込みで、発生に適している。(+)
- (3) 対策 ・雑草はアザミウマ類の増殖源になるので、施設内外の除草を行う。
・青色粘着板を設置し、発生状況を把握するとともに早期防除を行う。
・発生が見られた場合は、スピノエース顆粒水和剤、モスピラン水溶剤などをローテーション散布する。

5 トマト 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない
- (2) 根拠 ・現在の発生量は平年並。(±)
・日中に換気が十分行われるようになるため、発病にやや不適となる。(-)
- (3) 対策 ・ハウス内が多湿にならないよう換気やかん水に注意する。
・咲き終わった花卉や発病果、発病葉は伝染源となるので速やかに取り除き、ゲッター水和剤、ベルコートフロアブル等を散布する。

6 トマト うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：多い
(2) 根 拠 ・現在の発生量が多い。(+)
・向こう1カ月の平均気温は平年並～低い見込みで、発生にやや適している。(+)
(3) 対 策 ・発生初期にテーク水和剤、アフェットフロアブル等を葉裏にもよくかかるように散布する。

7 なし 黒星病

- (1) 発生予想 発生量：平年並
(2) 根 拠 ・昨年の発生は生育前半は多かったが、後半は平年並だった。(±)
・向こう1カ月の平均気温は平年並～低く、降水量は少ない見込みで、発生にやや不適である(-～±)
(3) 対 策 ・芽基部病斑は摘み取る。
・2分咲きから落花直後に治療効果があるDMI(EBI)剤、チオノックフロアブル(トレノックスフロアブル)等を散布する。
(4) 備 考 ・昨年多発した園では、防除を適切に行う。
・DMI(EBI)剤は耐性菌の発生を防止するため、合わせて年2回以内の使用とする。
・チオノックフロアブル、トレノックスフロアブルは同じ成分(チウラム)なので、総使用回数に注意する。

8 きく ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
(2) 根 拠 ・現在の発生量が多い。(+)
・向こう1ヶ月の降水量は少なく日照時間は多い見込みで、発生に適している。(+)
(3) 対 策 ・発生密度が高くなると防除が困難となるので、発生初期に気門封鎖系薬剤をスポット散布してハダニ類を低密度に抑える。
・ダニサラバフロアブル、コロマイト水和剤[適用害虫：ナミハダニ]等を葉裏によくかかるように散布する。

9 その他の病害虫

		現 況	発生予想			現 況	発生予想
いちご	アブラムシ類	平年並	平年並	きゅうり	コナジラミ類	やや少	やや少
	コナジラミ類	やや少	やや少	きく	アブラムシ類	多	やや多
トマト	葉かび病	やや少	やや少				

水稲箱施用剤は地域の病害虫発生状況に合わせて選びましょう！

イネドロオイムシ・ヒメトビウンカ(縞葉枯病)・イネツトムシ

・昨年水稲病害虫は、県中北部ではイネドロオイムシ、県南部ではヒメトビウンカ(縞葉枯病)、普通植栽培ではイネツトムシの発生が多く見られました。地域や移植時期によって病害虫の発生状況が異なることから、各地の発生状況に合わせて適切な箱施用剤を選びましょう。

・平成22年度植物防疫ニュース(速報No.5)「県中北部でイネドロオイムシ幼虫による被害が拡大しています！」(速報No.9)「ウンカ類幼虫の生息密度とイネ縞葉枯病の保毒虫率について」をご覧ください。

1か月気象予報(予報期間4月16日から5月15日 4月15日気象庁発表)

向こう一か月の平均気温は、平年並または低い確率ともに40%です。降水量は少ない確率が50%です。日照時間は多い確率が50%です。週別の気温は、1週目は低い確率が60%です。2週目は低い確率が50%です。3～4週目は平年並または高い確率ともに40%です。

	低い(少ない)確率	平年並の確率	高い(多い)確率
気温	40%	40%	20%
降水量	50%	30%	20%
日照時間	20%	30%	50%

NEWS & INFORMATION

「平成23年度 農作物等病害虫雑草防除の手引き」は4月上旬に発行されています。お求めの方は、社団法人 栃木県植物防疫協会(028-683-5533)にお問い合わせ願います。

携帯サイトからも「ご意見・ご質問」が送信できるようになりました。

詳しくは農業環境指導センター(<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/>)までお問い合わせください。

当センター携帯サイト(<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/keitai.htm>)もご利用ください。

Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012

平成23年度 病害虫発生予報 第2号

平成23年5月20日
栃木県農業環境指導センター

**ハウス栽培では栽培終了時に蒸し込みを行い害虫を防除しましょう！
ハダニ類やアザミウマ類は発生が少ない時期から適切に防除しましょ
う！**

予想期間 5月下旬～6月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 水稲 縞葉枯病(ヒメトビウンカ媒介)

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
(2) 根拠
 - ・ 昨年の発生量はやや多い。(+)
 - ・ ヒメトビウンカの越冬世代幼虫の発生量は多く、県南部の一部では越冬世代の縞葉枯病保毒虫率も高い(平成22年11月時点)。(+)

(3) 対策
 - ・ 地域の発生状況、発生情報に注意を払い、ほ場をよく観察する。
 - ・ 保毒虫率が高い地域で感受性品種(コシヒカリなど)を今後作付する場合は、防除効果の高い箱施用剤を使用する。
 - ・ [防除対策のポイントNo.15\(イネ縞葉枯病に注意しましょう\)](#)参照。
 - ・ [平成22年度植物防疫ニュース\(速報No.9\)「ウンカ類幼虫の生息密度とイネ縞葉枯病の保毒虫率について」](#)参照。

2 いちご(親株) ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
(2) 根拠
 - ・ 前作の発生量は多い。(+)
 - ・ 向こう1か月の平均気温は平年並～高い見込みで、発生にやや適している。(±～+)

(3) 対策
 - ・ ランナー発生数が増加する前に発生が見られる場合は、コテツフロアブル、テデオN乳剤等を葉裏にもよくかかるように散布する。
 - ・ 本ばから親株へハダニ類を持ち込まないようにするため、ハダニ類の発生している本ばの管理作業の後に親株の管理作業は行わない。

3 トマト コナジラミ類

- (1) 発生予想 発生量：平年並
(2) 根拠
 - ・ 現在の発生量はやや少ない。(-)
 - ・ 向こう1か月の平均気温は平年並～高い見込みで、発生にやや適している。(±～+)

(3) 対策
 - ・ 生育に応じて葉かきを実施し、葉裏に寄生した幼虫や蛹を除去する。除去した葉は、ビニル袋などで密封し、枯死させてから処分するか土中に埋める。
 - ・ コナジラミ類が発生しているほ場では、スタークル(アルバリン)顆粒水溶剤、チェス顆粒水和剤等をローテーション散布する。
 - ・ 冬春トマト栽培終了時には、野外にコナジラミ類を飛散させないため、地際から切断後、ハウス内が40℃前後を維持する時間が1日平均7時間以上確保できる条件で、3日間以上の蒸し込みを行う。

(4) 備考
 - ・ 蒸し込み時の過度な高温は、施設内の器具を傷めることがあるので注意する。

4 野菜・花き類 アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
(2) 根拠
 - ・ 現在の発生量は多い。(+)
 - ・ 向こう1か月の平均気温は平年並～高く、降水量は平年並～少ない見込みで、発生に適している。(+)

(3) 対策
 - ・ 雑草はアザミウマ類の増殖源になるので、ほ場内外の雑草防除を行う。
 - ・ 定植時に粒剤を使用する。
 - ・ 施設栽培では紫外線カットフィルムを被覆したり、施設開口部に防虫ネットを張ることにより、アザミウマ類の侵入を防ぐ。
 - ・ 栽培終了時には、ハウスを密閉して蒸し込みを行い、死滅させる。

(4) 備考
 - ・ アザミウマ類はウイルス病(キュウリ黄化えそ病：MYSV、ニラえそ条斑病：IYSV、キク茎えそ病：CSNV等)を媒介するので注意する。

5 なし 黒星病

- (1) 発生予想 発生量：平年並
- (2) 根 拠 ・現在の発生量はやや多い。(+)
・向こう1か月の降水量は平年並～少ない見込みで、発生にやや不適である。(±～-)
- (3) 対 策 ・芽基部病斑は摘み取る。
・芽基部病斑上の胞子形成抑制のため、アフェットフロアブル、ベルコートフロアブル等を散布する。
- (4) 備 考 ・当センターHPに「[ナシ黒星病菌の簡易薬剤感受性検定](#)」を掲載中。

6 きく ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は多い。(+)
・向こう1か月の平均気温は平年並～高く、降水量は平年並～少ない見込みで、発生に適している。(+)
- (3) 対 策 ・下葉や葉裏に多く発生するので、その部分に薬剤がよくかかるように散布する。また、生育初期から防除することでその後の発生密度を抑制できる。
・葉裏をよく観察し、発生が認められたら、気門封鎖系薬剤をスポット散布するか、オサダンフロアブル、コテツフロアブル等を散布する。

7 その他の病害虫

		現 況	発生予想			現 況	発生予想
水 稲	葉いもち	-	少	露地野菜類	アブラムシ類	やや多	やや多
	ニカメイガ	やや少	平年並		な し	シンクイムシ類	やや多
小 麦	赤かび病	少	やや少	果樹類	アブラムシ類	平年並	平年並
トマト	灰色かび病	やや多	やや多		カメムシ類	やや少	やや少
	葉かび病	やや少	やや少				

斑点米カメムシ類対策は、本田内の雑草対策も重要です！

水田周辺の雑草だけでなく、本田内の雑草（ノビエ、イヌホタルイなど）も斑点米カメムシ類を誘引し、発生源となります。水田内の雑草対策でカメムシ類の生息しにくい環境をつくり、斑点米の発生を防ぎましょう。

農薬を上手に使いこなしましょう！

ハウス内で農薬を散布するときは、午前中のうちに葉裏にも薬剤がよくかかるように散布する。同一薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

1か月予報（予報期間5月14日から6月13日 5月13日気象庁発表）

天気は数日の周期で変わるでしょう。平年に比べ晴れの日が多い見込みです。週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

	低い（少ない）確率	平年並の確率	高い（多い）確率
気 温	20%	40%	40%
降水量	40%	40%	20%
日照時間	20%	40%	40%

NEWS & INFORMATION

7月7・8日に農薬使用者等を対象とした「栃木県農薬管理指導士」等養成研修が開催されます。詳しくは、農政部経営技術課にお問い合わせください。Tel(028)623-2286
県では、農薬による事故等の発生防止を図るため、6月から8月の3か月間を「農薬危害防止運動期間」とし、農薬の適正使用等について啓発活動を行います。
「平成23年度 農作物等病害虫雑草防除の手引き」をお求めの方は、社団法人 栃木県植物防疫協会にお問い合わせください。Tel(028)683-5533 Fax(028)683-5530

携帯サイトからも「ご意見・ご質問」が送信できるようになりました。
詳しくは[農業環境指導センター](http://www.jppn.ne.jp/tochigi/)(<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/>)までお問い合わせください。
当センター[携帯サイト](http://www.jppn.ne.jp/tochigi/keitai.htm)(<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/keitai.htm>)もご利用ください。

Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012

平成23年度 病害虫発生予報 第3号

平成23年6月24日
栃木県農業環境指導センター

○高温少雨による害虫の増加に注意しましょう！ ○いちごのハダニ類やうどんこ病は親株・育苗期からの防除が大切です！

予想期間 6月下旬～7月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 水稲 いもち (葉いもち)

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない
(2) 根 拠 ・BLASTAM(アメダスに基づいた感染好適日情報)では、小山と真岡で平年を上回り、黒磯と佐野では平年並み、他の地域では下回っている(23日現在)。(±)
・向こう1か月の平均気温は高く、降水量は少ない見込み。(－)
・防除員の調査でも発生が認められている。(±)
(3) 対 策 ・発生が見られた場合には、早急にアミスターエイト、カスラブサイドゾル等の予防・治療効果のある薬剤を散布する。(平年初発時期は6月第5半旬頃)
(4) 備 考 ・当センターホームページにBLASTAMの情報を掲載中。
・感染好適条件は平均気温20℃前後で、弱い連続降雨がある時。

2 水稲 縞葉枯病 (ヒメトビウンカ媒介)

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
(2) 根 拠 ・6月第1半旬から本田へのヒメトビウンカ成虫の飛び込みが確認され、発生量は前年並みであった。(±)
・6月第4半旬から発病株が確認されており、やや早い発生であった。(＋)
・第一世代幼虫の保毒虫率が比較的高い地域が散見される。(＋)
(3) 対 策 ・縞葉枯病に感受性の品種(コシヒカリ、なすひかり等)では、地域の発生状況、発生情報に注意を払い、ほ場をよく観察する。
(4) 備 考 ・防除対策のポイントNo. 15 (イネ縞葉枯病に注意しましょう)参照。
・平成22年度植物防疫ニュース(速報No. 9)「ウンカ類幼虫の生息密度とイネ縞葉枯病の保毒虫率について」参照。

3 いちご(親株・育苗) ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
(2) 根 拠 ・現在の発生量はやや多い。(＋)
・向こう1か月の平均気温は高く降水量は少ない見込みで、発生に適する。(＋)
(3) 対 策 ・多発時には採苗前にマイトコーネフロアブル、コロマイト水和剤などを葉裏にもよくかかるように散布する。
・本圃へのハダニの持ち込みを防止するために、育苗時に適切に防除する。
・ハウス内の雑草はハダニの増殖場所になるため、除草を徹底する。
(4) 備 考 ・当センターHPに「いちご病害虫情報第12号」ハダニ、うどんこ病防除の優良事例の紹介を掲載中。

4 いちご(親株・育苗) うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：平年並
(2) 根 拠 ・現在の発生量はやや多い。(＋)
・向こう1か月の平均気温は高く降水量は少ない見込みで、発生にやや不適である。(－)
(3) 対 策 ・生育に応じて葉かきを実施し、株の風通しを良くする。
・本圃への菌の持ち込みを防ぐため、親株および苗床で適切に防除する。
・高温時には菌の活動が抑えられ病徴が見えにくくなるが、菌は残存している。
定植後の多発を防ぐため、この時期にアミスター20フロアブル、ベルクトフロアブルなどで適切に防除し、必要に応じて予防散布する。

5 野菜・花き類(露地・施設) アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
(2) 根 拠 ・現在の発生量は多い(きゅうり)～やや多い(なす・きく)。(＋)
・向こう1か月の平均気温は高く降水量は少ない見込みで、発生に適する。(＋)

- (3) 対策 ・雑草はアザミウマ類の増殖源になるので、ほ場内外の雑草防除を行う。
 ・施設栽培では紫外線カットフィルムを被覆したり、施設開口部に防虫ネットを張ることにより、アザミウマ類の侵入を防ぐ。
 ・栽培終了時にはハウスを密閉して蒸し込みを行い、確実に死滅させる。
- (4) 備考 ・アザミウマ類はウイルス病（キュウリ黄化えそ病：MYSV、ニラえそ条斑病：IYSV、キク茎えそ病：CSNV等）を媒介するので注意する。
 ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同系統薬剤の連用は避ける。

6 なし 黒星病

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根拠 ・現在の発生量はやや多い。(+)
 ・向こう1か月の降水量は少ない見込みで、発生にやや不適である。(－)
- (3) 対策 ・発病した葉や果実は伝染源となるため、摘み取って圃場外で処分する。
 ・多発圃場では、ストロビードライフロアブル、ナリアWDG等を散布する。
- (4) 備考 ・当センターHPに「ナシ黒星病菌の簡易薬剤感受性検定」を掲載中。

7 その他の病害虫

		現況	発生予想		現況	発生予想
いちご	アブラムシ類	多	多	なし	ハダニ類	やや多
	炭疽病	少	平年並		アブラムシ類	多
トマト	灰色かび病	多	やや多	なし	ナシヒメシンクイ	やや多
	葉かび病	やや少	やや少	果樹類	カメムシ類	やや少
	コナジラミ類	やや少	平年並	きく	ハダニ類	多
きゅうり	べと病	多	やや多			

○圃場の雑草対策は害虫防除の基本です！

水田では、周辺の雑草だけでなく、本田内の雑草（ノビエ、イヌホタルイなど）も斑点米カメムシ類を誘引し、発生源となります。また、施設・露地に関わらずあらゆる野菜類や花き類の圃場でも、圃場内外の雑草（ホトケノザ、ウシハコベ、ヒメムカシヨモギなど）はハダニ類やアザミウマ類、アブラムシ類の温床となります。薬剤散布時には、雑草が害虫の避難場所の役目を果たし、作物上への再侵入だけでなく、薬剤抵抗性発達の一因にもなります。適切な雑草対策で害虫類の生息しにくい環境をつくりましょう。

○農薬を適正に使いましょう！（6～8月は農薬危害防止運動期間です！）

- ・ミツバチやマルハナバチに対する安全日数を目安に適切な薬剤を選択しましょう。
- ・農薬散布時には、周辺の人や農作物等にかからないように十分注意し、周辺住民に周知を図るとともに、散布の時間帯にも気を配りましょう。
- ・必ず農薬容器のラベルをよく読み、使用方法・使用上の注意事項を守りましょう。

1か月予報（予報期間6月18日から7月17日 6月17日気象庁発表）

平年に比べ曇りや雨の日が少ない見込みです。期間の前半に気温が平年よりかなり高くなるおそれがあります。週別の気温は、1週目と2週目は共に、平年並みの確率30%、高い確率60%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

	低い（少ない）確率	平年並の確率	高い（多い）確率
○気温	10%	30%	60%
○降水量	50%	30%	20%
○日照時間	20%	40%	40%

NEWS & INFORMATION

- ☆ 7月7・8日に農薬使用者等を対象とした「栃木県農薬管理指導士」等養成研修が開催されます。詳しくは、農政部経営技術課にお問い合わせください。Tel(028)623-2286
- ☆ 県では、農薬による事故等の発生防止を図るため、6月から8月の3か月間を「農薬危害防止運動期間」とし、農薬の適正使用等について啓発活動を行います。
- ☆ 「平成23年度 農作物等病害虫雑草防除の手引き」をお求めの方は、社団法人 栃木県植物防疫協会にお問い合わせください。Tel(028)683-5533 Fax(028)683-5530

携帯サイトからも「ご意見・ご質問」が送信できるようになりました。

詳しくは農業環境指導センター(<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/>)までお問い合わせください。

当センター携帯サイト(<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/keitai.htm>)もご利用ください。

Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012

平成23年度 病害虫発生予報 第4号

平成23年7月22日
栃木県農業環境指導センター

斑点米カメムシ類、ハダニ類、アザミウマ類の多発が懸念されます。 イチゴ炭疽病の発生に注意しましょう！

予想期間 7月下旬～8月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。
根拠となる現況データはホームページに掲載中。

1 水稲 いもち病

- (1) 発生予想 発生量：少ない
- (2) 根拠
- ・現在の発生はやや少ない(-)。
 - ・BLASTAMによると6月から7月(7/18現在まで)を通して、感染好適条件の発生は、平年を上回っている地点数は少なく、連続した出現はない。(-)
 - ・向こう1か月の平均気温は平年並～高い見込みで、発生に不適な条件となっている。(-)
- (3) 対策
- ・葉いもちが見られる場合は、穂ぞろい期にアミスターエイト、ブラシンフロアブル、カスラブサイドゾル等の予防・治療効果の高い薬剤を散布する。
- (4) 備考
- ・当センターホームページにBLASTAMの情報を掲載中。
 - ・感染好適条件は平均気温20前後で、弱い連続降雨がある時。

2 水稲 斑点米カメムシ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根拠
- ・7月上旬の雑草地すくい取りでは発生は平年並で、カスミカメ類が広く発生している。(±)
 - ・向こう1か月の平均気温は平年並～高い見込みで、発生に適している。(+)。
- (3) 対策
- ・穂ぞろい期に斑点米カメムシ類が水田内で見られる場合は、乳熟初期(出穂期7～10日後)までにMR・ジョーカーEW、スタークル液剤10(スタークルメイト液剤10)等を散布する。
 - ・防除後も斑点米カメムシ類が見られる場合は、7～10日間隔で1～2回の追加散布を行う。
- (4) 備考
- ・植物防疫ニュース(速報No.4)「カスミカメ類(小型の斑点米カメムシ類)が平年より広範囲で発生しています！」をホームページに掲載しました。

3 いちご 炭疽病

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根拠
- ・現在の発生はやや少ない。(-)
 - ・7/6、13の巡回調査で発生がみられ、発生が平年に比べ早い。(+)。
 - ・向こう1か月の平均気温は平年並～高い見込みで、発生に適している。(+)。
- (3) 対策
- ・水滴の飛散等で伝染するので、できるだけ水の跳ね返りがないようなかん水を行う。
 - ・風通しを良くするとともに、茎葉のぬれ時間が長くないよう、かん水はできるだけ晴天日の午前中に行い、曇雨天日及び夕方のかん水を控える。
 - ・症状が出てからの防除は困難なので、発生前から定期的に、ゲッター水和剤(定植前日まで)、ベルコート水和剤(育苗期(定植前))等をローテーション散布する。
 - ・気温が高い時期は、防除の間隔が長くなると感染の危険性が高まるので、7～10日間隔で防除する。
 - ・被害株、被害茎葉及びランナーは見つけ次第取り除き、ほ場外で処分する。
- (4) 備考
- ・「薬剤耐性・感受性検定結果」をホームページに掲載中。

4 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない
- (2) 根拠
- ・一部で発生株率62%のほ場があるが、高温の影響により病斑の進展が抑制されている。(±)
 - ・向こう1か月の平均気温は平年並～高い見込みで、発生にやや不適である。(-～±)
- (3) 対策
- ・高温期には病徴が見えにくくなるが、病徴が見えない場合でも、この時期にタフパール[適用作物：野菜類]、ジーファイン水和剤[適用作物：野菜類]等で予防する。
 - ・発生が見られたら、フルピカフロアブル、サンヨール等を散布し、本ほへのうどんこ病菌の持ち込みを防ぐ。
- (4) 備考
- ・タフパールは微生物農薬であるため、他の殺菌剤との混用を避ける。

5 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
 (2) 根 拠 ・現在の発生はやや多い。発生ほ場率は59%(平年比174%)。(+)
 ・向こう1か月の平均気温は平年並～高い見込みで、発生に適している。(+)
 (3) 対 策 ・苗による本ぼへの持ち込みを防ぐため、育苗床での防除を適正に行う。
 ・葉裏を注意深く観察し、発生を認めたら気門封鎖系薬剤をスポット散布するか、コテツフロアブル、テデオン乳剤等を葉裏によくかかるように散布する。
 ・ハウス内の雑草はハダニ類の増殖場所になるため、除草を徹底する。
 (4) 備 考 ・当センターHPに「いちご病害虫情報第12号」ハダニ、うどんこ病防除優良事例を掲載中。

6 トマト コナジラミ類

- (1) 発生予想 発生量：平年並
 (2) 根 拠 ・現在の発生はやや少ない。(-)
 ・向こう1か月の平均気温は平年並～高い見込みで、発生に適している。(+)
 (3) 対 策 ・ほ場周辺の除草を徹底する。
 ・タバココナジラミ類はトマト黄化葉巻病ウイルスを媒介するので、施設の開口部に0.4mm目以下の防虫ネットを張り侵入を防ぐ。光反射シートや近紫外線カットフィルムも効果がある。
 ・今後定植する作型では、育苗期及び定植時にベストガード粒剤、スタークル(アルバリン)粒剤等を施用する。

7 野菜・花き類(露地・施設) アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
 (2) 根 拠 ・現在の発生量が多い～やや多い(なす・きゅうり・ねぎ・きく)。(+)
 ・向こう1か月の平均気温は平年並～高い見込みで、発生に適している。(+)
 (3) 対 策 ・雑草はアザミウマ類の増殖源になるので、ほ場内外の雑草防除を行う。
 ・施設栽培では紫外線カットフィルムを被覆したり、施設開口部に防虫ネットを張ることにより、アザミウマ類の侵入を防ぐ。
 ・栽培終了時にはハウスを密閉して蒸し込みを行い、確実に死滅させる。
 (4) 備 考 ・アザミウマ類はウイルス病(キュウリ黄化えそ病:MYSV、ニラえそ条斑病:�YSV、キク茎えそ病:CSNV、キクえそ病:TSWV等)を媒介するので注意する。

8 その他の病害虫

	現 況	発生予想		現 況	発生予想		
水 稲	縞葉枯病	多	多	なし	ナシヒメシンクイ	やや多	やや多
いちご	萎黄病	少	やや少	ぶどう	べと病	やや多	平年並
トマト	灰色かび病	多	やや多	りんご	斑点落葉病	多	やや多
な す	ハダニ類	やや多	多	果 樹	カメムシ類	やや少	平年並
きゅうり	褐斑病	平年並	やや少	き く	白さび病	少	少
ね ぎ	黒斑病	平年並	やや少		ハダニ	多	多
な し	黒星病	やや多	平年並				

農薬を適正に使いましょう!(6～8月は農薬危害防止運動期間です!)

- ・マルハナバチに対する安全日数を目安に適切な薬剤を選択しましょう。
- ・農薬散布時には、周辺の人や農作物等にかからないように十分注意し、周辺住民に周知を図るとともに、散布の時間帯にも気を配りましょう。
- ・必ず農薬容器のラベルをよく読み、使用方法・使用上の注意事項を守りましょう。

1か月気象予報(予報期間7月16日から8月15日 7月15日気象庁発表)

週別の気温は、1週目は、高い確率60%です。2週目は、平年並または低い確率ともに40%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

	低い(少ない)確率	平年並の確率	高い(多い)確率
気 温	20%	40%	40%
降水量	20%	30%	50%
日照時間	30%	40%	30%

NEWS & INFORMATION

ToMV 新システムによる病害が5月に県内の施設トマトで初めて確認されました。詳細は、当センターのホームページ内にある「特殊報第1号(ToMV 新システムによる病害について)」を参照ください。

携帯サイトからも「ご意見・ご質問」が送信できるようになりました。
 詳しくは農業環境指導センター(<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/>)までお問い合わせください。
 当センター携帯サイト(<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/keitai.htm>)もご利用ください。

Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012

平成23年度 病害虫発生予報 第5号

平成23年8月19日
栃木県農業環境指導センター

いちご炭疽病の防除をしましょう！ ハスモンヨトウ、ハダニ類の防除は早め実施しましょう！

予想期間 8月下旬～9月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 大豆・野菜類

ハスモンヨトウ幼虫

(1) 発生予想

発生量：多い 発生時期：やや早い

(2) 根拠

- ・大豆における現在の発生ほ場率は高い(平年比：ほ場率275%)。(+)。
- ・これまでのフェロモントラップへの成虫誘殺数は多い。(+)。
- ・向こう1か月の平均気温は高く、降水量は平年並の見込みで発生に適している。(+)。

(3) 対策

- ・定期的にはほ場をよく観察して早期発見に努め、発生を確認した卵塊や分散前の幼虫は寄生葉ごと摘み取り処分する。
- ・ハスモンヨトウの幼虫は齢期が進むと薬剤が効きにくくなるので、発生初期に薬剤を散布する。

(4) 備考

- ・施設栽培では、開口部に防虫ネット等を張り、侵入を防ぐ。
- ・植物防疫ニュース(速報No.7)「ハスモンヨトウ成虫が多く発生しています！」(速報No.10)「大豆におけるハスモンヨトウの動向に注意しましょう！」をホームページに掲載しました。

2 いちご 炭疽病

(1) 発生予想

発生量：多い

(2) 根拠

- ・現在の発生量は多い(平年比：ほ場率407%、株率167%)。(+)。
- ・向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生に適している。(+)。
- ・被害株、被害茎葉及びびランナーは見つけ次第取り除き、ほ場外で処分する。
- ・水滴の飛散等によって伝染するので、できるだけ水の跳ね返りがないようなかん水を行う。

(3) 対策

- ・風通しを良くするとともに、茎葉のぬれ時間が長くないよう、かん水はできるだけ晴天日の午前中に行い、曇雨天日及び夕方のかん水を控える。
- ・被害株の周辺や発生の恐れがある場合には、バイコラール水和剤(育苗期)、オキシンドー水和剤80(育苗期)等を散布する。

(4) 備考

- ・「薬剤耐性・感受性検定結果」をホームページに掲載中。

3 いちご うどんこ病

(1) 発生予想

発生量：平年並

(2) 根拠

- ・現在の発生は平年並(平年比：ほ場率76%、株率62%)。(±)
- ・向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生にやや不適な条件となっている。(±～-)

(3) 対策

- ・高温期に病徴が見えない場合でも、この時期にタフパール、ジーファイン水和剤等で予防する。
- ・発生が見られたら、パンチョTF顆粒水和剤、サンヨール等を散布し、本ばへのうどんこ病菌の持ち込みを防ぐ。

(4) 備考

- ・タフパールは微生物農薬であるため、他の殺菌剤との混用を避ける。

4 いちご ハダニ類

(1) 発生予想

発生量：多い

(2) 根拠

- ・現在の発生量は多い(平年比：ほ場率209%、株率277%)。(+)。
- ・向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生に適している。(+)。

(3) 対策

- ・苗による本ばへの持ち込みを防ぐため、育苗床での防除を適切に行う。
- ・葉裏を注意深く観察し、発生を認めたら気門封鎖系薬剤をスポット散布するか、コテツフロアブル、コロマイト水和剤等を葉裏によくかかるように散布する。
- ・ハウス内の雑草はハダニ類の増殖場所になるため、除草を徹底する。

5 トマト コナジラミ類

(1) 発生予想

発生量：やや多い

(2) 根拠

- ・夏秋トマトでの現在の発生量は平年並(平年比：ほ場率82%、株率96%)。

- (±)
- (3) 対策
- ・向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生に適している。(+)
 - ・ほ場周辺の除草を徹底する。
 - ・タバココナジラミはトマト黄化葉巻ウイルスを媒介するので、施設の開口部に0.4mm目以下の防虫ネットを張り侵入を防ぐ。光反射シートや近紫外線カットフィルムも効果がある。
 - ・今後定植する作型では、育苗期、定植時にスタークル(アルバリン)粒剤、ベストガード粒剤(ベストガード粒剤の育苗期株元処理及び定植時土壌混和は合計1回以内)等を施用する。

6 なす オオタバコガ幼虫

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根拠
- ・夏秋なすでの現在の発生量が多い(平年比：ほ場率1200%、株率1300%) (+)
- (3) 対策
- ・向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生に適している。(+)
 - ・食入された果実は早めにほ場外に持ち出して処分する。
 - ・花や果実をよく観察し、発生が認められたらスピノエース顆粒水和剤、アファーム乳剤等を葉裏にもよくかかるように散布する。

7 きく ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根拠
- ・現在の発生量が多い(平年比：ほ場率209%、株率279%) (+)
 - ・向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生に適している。(+)
- (3) 対策
- ・下葉や葉裏に多く発生するので、その部分に薬剤がよくかかるように散布する。生育初期から防除することでその後の発生密度を抑制できる。
 - ・葉裏をよく観察し、発生が認められたら、気門封鎖系薬剤をスポット散布するか、コロマイト水和剤[適用害虫：ナミハダニ]、コテツフロアブル等を散布する。

8 その他の病害虫

	現況	発生予想		現況	発生予想	
水稲	穂いもち	やや少	やや少	ねぎ	やや多	
	縞葉枯病	多	多		なし	多
	斑点米かみシ類	やや多	-		りんご	多
いちご	萎黄病	少	少	果樹	やや多	
	アザミウマ類	多	多		カメムシ類	やや少
なす	黒斑病	平年並	平年並	きく	少	
ねぎ						

大豆の紫斑病・カメムシ類防除について

- ・紫斑病とカメムシ類の防除適期は隣接しているため、同時防除が可能です。
- ・防除適期
 - 紫斑病：開花期15日後から35日後(昨年発生が多かったところは2回以上)
 - カメムシ類：開花期15日後から10～14日間隔(発生が多く見られる場合は、散布間隔を短く回数を多くする)

水稲の縞葉枯病の発生に注意しましょう!

- ・発生地域が県全域に拡大しています。出穂後は後期発病(出すくみ)が見やすくなるため、ほ場での発病状況を確認し、次作への対策を検討しましょう。

1か月気象予報(予報期間8月13日から9月12日 8月12日気象庁発表)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。向こう1か月の平均気温は高い確率50%です。週別の気温は、1週目は高い確率80%、2週目は平年並または低い確率40%、3～4週目は平年並または高い確率40%です。

	低い(少ない)確率	平年並の確率	高い(多い)確率
気温	20%	30%	50%
降水量	30%	40%	30%
日照時間	30%	40%	30%

NEWS & INFORMATION

「平成23年度 農作物等病害虫雑草防除の手引き」のお求めは、(社)栃木県植物防疫協会にお問い合わせください。Tel (028)683-5533 Fax (028)683-5530

携帯サイトからも「ご意見・ご質問」が送信できるようになりました。
 詳しくは農業環境指導センター(<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/>)までお問い合わせください。
 当センター携帯サイト(<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/keitai.htm>)もご利用ください。
 Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012

平成23年度 病害虫発生予報 第6号

平成23年9月16日
栃木県農業環境指導センター

イチゴ炭疽病が多発しています！ ハスモンヨトウの防除は早めの実施しましょう！

予想期間 9月下旬～10月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 野菜類・大豆 ハスモンヨトウ

(1) 発生予想

発生量：多い

(2) 根拠

- ・現在、大豆ほ場で幼虫の発生が多い(平年比：ほ場率191%)。(+) (+)
- ・向こう1か月の平均気温は高く降水量は少ない見込みで、増殖に適している。

(3) 対策

- ・定期的にはほ場をよく観察して早期発見に努め、発生を確認した卵塊や分散前の幼虫は寄生葉とともに摘み取り処分する。
- ・ハスモンヨトウの幼虫は齢期が進むと薬剤が効きにくくなるので、発生初期に薬剤を散布する。

(4) 備考

- ・施設栽培では、開口部に防虫ネット等を張り、侵入を防ぐ。
- ・植物防疫ニュース(速報No.11)「大豆で再びハスモンヨトウ幼虫の発生が始まっています」をホームページに掲載しました。
- ・「ハスモンヨトウ3齢幼虫の薬剤感受性検定」をホームページに掲載中(適用作物注意)

2 いちご 炭疽病

(1) 発生予想

発生量：多い

(2) 根拠

- ・現在の発生量は多い(平年比：ほ場率994%、発生株率1400%)。(+) (+)
- ・向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生に適している。

(3) 対策

- ・被害株は見つけ次第取り除き、ほ場外で処分する。また、潜在感染株を本ほ場に持ち込まないために、感染株周囲の株はできるだけ使用しない。
- ・水滴の飛散等によって伝染するので、できるだけ水の跳ね返りがないようなかん水を行う。
- ・風通しを良くするとともに、茎葉のぬれ時間が長ならないよう、かん水はできるだけ晴天日の午前中に行い、曇雨天日及び夕方のかん水を控える。
- ・被害株の周辺や発生の恐れがある場合には、ゲッター水和剤(定植前まで)、サンリット水和剤等を散布する。

(4) 備考

- ・病害虫発生予察注意報第1号(イチゴ炭疽病)をホームページに掲載しました。
- ・「イチゴ炭疽病の薬剤感受性検定」をホームページに掲載中。

3 いちご ハダニ類

(1) 発生予想

発生量：やや多い

(2) 根拠

- ・現在の発生量は平年並(平年比：ほ場率122%、発生株率76%)。(±) (±)
- ・向こう1か月の降水量は少ない見込みで、増殖に適している。

(3) 対策

- ・発生初期に気門封鎖系薬剤をスポット散布して拡大を防ぐ。
- ・マルチ前の下葉かきにあわせてテデオン乳剤、マイトコーネフロアブル等を散布する。
- ・スパイカルE X <適用作物：野菜類(施設栽培)>等の天敵農薬を使用する場合は、放飼前に必ず防除を行い発生密度を低下させる。

4 トマト コナジラミ類

(1) 発生予想

発生量：やや多い

(2) 根拠

- ・病害虫防除員の報告では、現在の発生量はオンシツコナジラミが平年並(±)、タバココナジラミが多い。(+) (±)

(3) 対策

- ・向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生に適している。
- ・ほ場周辺の除草を徹底する。
- ・タバココナジラミはトマト黄化葉巻ウイルスを媒介するので、施設の開口部に0.4mm目以下の防虫ネットを張り侵入を防ぐ。光反射シートや近紫外線カットフィルムも効果がある。

- ・黄色粘着板を施設内に設置し、コナジラミ類を捕殺する。特に開口部付近には多めに設置する
- ・育苗期、定植時にベストガード粒剤、スタークル(アルバリン)粒剤を使用する。
- ・近紫外線カットフィルム、粒剤は、マルハナバチに影響があるので注意する。

(4) 備考

5 きゅうり アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根 拠
- ・現在の発生量が多い(平年比：ほ場率 245 %、発生株率 418%)。(+)
 - ・向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生に適している。(+)
- (3) 対策
- ・施設内外の除草や、施設内の不要な作物を除去する。
 - ・ミナミキイロアザミウマはキュウリ黄化えそ病を媒介するので、施設開口部に防虫ネット等を張り侵入を防ぐ。
 - ・施設内に青色粘着トラップを設置し、早期発見に努める。
 - ・密度の低い時期にスワルスキー<適用作物：野菜類(施設栽培)>等の天敵農薬を使用する。
 - ・アファーム乳剤〔適用害虫：ミナミキイロアザミウマ〕等を散布する。
- (4) 備考
- ・「きゅうりから採集したミナミキイロアザミウマの薬剤感受性検定結果」をホームページに掲載中。

6 その他の病害虫

		現 況	発生予想			現 況	発生予想
大豆	吸実性かみ類	やや多	多	にら	ネダニ	多	多
	アブラムシ類	平年並	平年並	ねぎ	アザミウマ類	並	やや多
いちご	うどんこ病	やや少	やや少		べと病	やや多	平年並
	アブラムシ類	多	多	きく	ハダニ類	多	多
なす	アザミウマ類	多	多		白さび病	少	少

秋の病害虫防除対策

トマト黄化葉巻病 (TYLCV)

- ・前作の越冬・冬春作型調査では、発生が平年に比べやや多かった。
- ・黄化葉巻病はタバココナジラミの吸汁によって媒介されるので、タバココナジラミの防除を行う。
- ・TYLCVは管理作業では伝染しない(汁液伝染、土壌伝染、種子伝染、経卵伝染しない)。ウイルスを獲得したタバココナジラミは、約1日の潜伏期間を経て死ぬまで伝搬能力を持つ。
- ・ハウス内外の野良生えトマトは、TYLCVの重要な感染源となるので必ず除去する。また、多くの雑草にタバココナジラミが寄生するため、ほ場内と周辺雑草を除去する。
- ・感染が疑われる苗は、定植しない。
- ・罹病株は伝染源となるので、見つけ次第抜き取る。抜き取った株は放置せず、土中に埋設するか、ビニル袋などで密封し枯死させてから処分する。
- ・罹病株があった場合は、その近隣の株も抜き取り処分する。

なし黒星病

- ・黒星病菌は芽や落葉で越冬し翌年の発生源になるので、収穫終了後は必ず薬剤散布を行い、園内外の落葉を集めて適切に処分する。

1か月気象予報(予報期間9月10日から10月9日 9月9日気象庁発表)

関東甲信地方の天気は数日の周期で変わるでしょう。平年に比べ晴れの日が多い見込みです。週別の気温は、1週目は高い確率が80%、2週目は高い確率が60%、3~4週目は平年並みまたは高い確率がともに40%です。

	低い(少ない) 確率	平年並の確率	高い(多い) 確率
気温	10%	20%	70%
降水量	40%	40%	20%
日照時間	20%	40%	40%

NEWS & INFORMATION

「栃木県農薬管理指導士」養成研修会が11月7日、8日に栃木県総合文化センターにおいて開催されます。詳しくは農政部経営技術課環境保全型農業担当までお問い合わせください。

Tel(028)623-2286

携帯サイトからも「ご意見・ご質問」が送信できるようになりました。

詳しくは農業環境指導センター(<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/>)までお問い合わせください。

当センター携帯サイト(<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/keitai.htm>)もご利用ください。

Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012

平成23年度 病害虫発生予報 第7号

平成23年10月20日
栃木県農業環境指導センター

**ハダニ類の多発が懸念されます！
いちご萎黄病やトマト黄化葉巻病の発病株は抜き取り処分しましょう！**

予想期間 10月下旬～11月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：平年並
- (2) 根拠
- ・現在の発生量はやや少ない(平年比：ほ場率46%、発生株率55%)。(-)
 - ・向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生に適している。(+)
- (3) 対策
- ・軟弱徒長すると発生が多くなるので、適正な温度管理やかん水を行う。
 - ・現在発生が見られなくても、今後発生する可能性があるため、保温開始までにタフパール、サンヨール等で予防する。
 - ・施設のサイドを下ろし、保温を開始したら、硫黄粒剤でくん煙する。
 - ・発生初期にアミスター20フロアブル、フルピカフロアブル等を葉裏にもよくかかるように散布する。
- (4) 備考
- ・タフパールは微生物農薬であるため、他の殺菌剤との混用を避ける。

2 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根拠
- ・現在の発生量は多い(平年比：ほ場率302%、発生株率282%)。(+)
 - ・向こう1か月の平均気温は高い見込みで、増殖に適している。(+)
- (3) 対策
- ・発生初期に気門封鎖系薬剤をスポット散布するか、スターマイトフロアブル、アファーム乳剤等を散布する。
- (4) 備考
- ・スパイカルE X等の天敵農薬を使用する場合には、放飼前に必ず防除を行い発生密度を低下させる。

3 トマト 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：平年並
- (2) 根拠
- ・調査を行っている12ほ場では発生が確認されていない。(-)
 - ・向こう1か月の降水量は平年並～多く、日照時間が少ない見込みで、発生に適している。(+)
- (3) 対策
- ・施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。また、循環扇や暖房機等を稼働し、植物体表面の結露を除去する。
 - ・咲き終わった花卉や発病果、発病葉は感染源となるので早急に取り除き、施設外で処分する。
 - ・発生初期にカリグリーン、フルピカフロアブル等を葉裏にもよくかかるように散布する。
- (4) 備考
- ・予防としてボトキラー水和剤のダクト内投入を行う場合には、あらかじめ薬剤散布等で菌密度を下げておく。

4 トマト 黄化葉巻病(TYLCV)

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根拠
- ・現在の発生量は多い。(+)
 - ・向こう1か月の平均気温は高い見込みで、媒介虫であるタバココナジラミの増殖に適している。(+)
 - ・タバココナジラミの現在の発生量は平年並(平年比：ほ場率120%)。(+)
- (3) 対策
- ・タバココナジラミの吸汁によって媒介されるので、タバココナジラミの防除を行う。
 - ・ハウス周辺の野生えトマトは、TYLCVの重要な感染源となるので必ず除去する。また、多くの雑草にタバココナジラミが寄生するため、ほ場内と周辺雑草を除去する。
 - ・感染が疑われる苗は、定植しない。
 - ・罹病株は伝染源となるので、見つけ次第抜き取る。抜き取った株は放置せず、土中に埋設するか、ビニル袋などで密封し枯死させてから処分する。
 - ・罹病株があった場合は、その近隣の株も抜き取り処分する。
- (4) 備考
- ・TYLCVは管理作業では伝染しない(汁液伝染、土壌伝染、種子伝染、経卵伝

染しない)。ウイルスを獲得したタバココナジラミは、約1日の潜伏期間を経て死ぬまで伝搬能力を持つ(タバココナジラミの生存期間は約25日)。

5 きく ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
 (2) 根 拠 ・現在の発生量は多い(平年比：ほ場率189%、発生株率300%)。(+)
 ・向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生に適している。(+)
 (3) 対 策 ・下葉や葉裏に多く発生するので、その部分に薬剤がよくかかるように散布する。生育初期から防除することでその後の発生密度を抑制できる。
 ・葉裏をよく観察し、発生が認められたら、発生初期に気門封鎖系薬剤をスポット散布するか、マイトコーネフロアブル[適用害虫：ミハダニ]、ダニサラバフロアブル等を散布する。

6 その他の病害虫

	現 況	発生予想		現 況	発生予想
いちご	炭疽病	やや多	きゅうり	褐斑病	やや多
	萎黄病	多		アザミウマ類	多
	アザミウマ類	多	にら	白斑葉枯病	平年並
トマト	コナジラミ類	平年並	茎葉野菜類	ハスモンヨトウ	やや多
きゅうり	うどんこ病	やや多			やや多

秋冬の病害虫防除対策

イネ縞葉枯病、イネ萎黄病

- 再生稲での発生は次年度の伝染源になるので、早めに秋耕を行う。

コムギ縞萎縮病

- 農林61号、タマイズミは罹病しやすいため、ほ場の選定に注意する。
- 汚染ほ場の拡大を防止するため、作業順序に気を配り、作業機の洗浄を心がける。
- 排水対策を行う。湿田では暗きよ等の積極的な排水を行う。
- 早播きすると発生しやすいので、播種適期内の遅めの時期に播種する。
- 地域別の播種適期は以下のとおり。

県北部：11月 1日～11月10日

県中部：11月 6日～11月15日

県南部：11月 9日～11月18日

なし黒星病

- 病原菌は芽や落葉で越冬し、翌年の発生源となるため、収穫終了後は徒長枝の先端までまんべんなく薬剤がかかるよう丁寧に薬剤散布を行い、園内外の落葉を集めて適切に処分する。防除の際は周辺へ飛散(ドリフト)しないよう十分注意する。

農薬を適正に使いましょう!

- ミツバチやマルハナバチに対する安全日数を目安に薬剤を選択しましょう。
- 農薬を散布する場合には、周辺の人や農作物等にかからないように十分注意し、周辺住民に周知するとともに散布の時間帯にも気を配りましょう。
- 農薬を使用する場合は必ず農薬容器のラベルをよく読み、使用方法・使用上の注意事項を守りましょう。

1か月気象予報(予報期間10月15日から11月14日 10月15日気象庁発表)

天気は数日の周期で変わるでしょう。週別の気温は、1週目は、高い確率50%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

	低い(少ない)確率	平年並の確率	高い(多い)確率
気温	20%	30%	50%
降水量	20%	40%	40%
日照時間	40%	30%	30%

NEWS & INFORMATION

「栃木県農薬管理指導士」養成研修会が11月7日、8日に栃木県総合文化センターにおいて開催されます。詳しくは農政部経営技術課環境保全型農業担当までお問い合わせください。

Tel(028)623-2286

携帯サイトからも「ご意見・ご質問」が送信できるようになりました。

詳しくは農業環境指導センター(<http://www.jpjn.ne.jp/tochigi/>)までお問い合わせください。

当センター携帯サイト(<http://www.jpjn.ne.jp/tochigi/keitai.htm>)もご利用ください。

Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012

平成23年度 病害虫発生予報 第8号

平成23年11月18日
栃木県農業環境指導センター

施設栽培でハダニ類、アザミウマ類が多く発生しています！ トマト黄化葉巻病の発病株は必ず抜き取り処分しましょう！

予想期間 11月下旬～12月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
(2) 根拠 ・現在の発生は平年並み(平年比：ほ場率62%、株率77%)。(±)
・向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生に好適な条件である。(+)
(3) 対策 ・軟弱徒長すると発生が多くなるので、適切な温度管理やかん水を行う。
・発生が見えなくても今後発生する可能性があるため、硫黄粒剤でくん煙する。
・発生初期にストロビーフロアブル、ベルコートフロアブル等を葉裏にもよくかかるように散布する。

2 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
(2) 根拠 ・現在の発生は多い(平年比：ほ場率258%、株率355%)。(+)
・向こう1か月の平均気温は高い見込みで、増殖に適している。(+)
(3) 対策 ・ハダニ類は下葉に多いので、必要に応じて下葉かきを行う。
・発生初期に気門封鎖系薬剤をスポット散布するか、マイトコーネフロアブル、コロマイト水和剤等を葉裏にもよくかかるように散布する。
(4) 備考 ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
・天敵導入前には予め防除を行い、ハダニの密度を下げしておく。防除には、天敵に影響の少ない薬剤を選定すること。
・当センターHPに「植物防疫ニュースNo.14」を掲載中。

3 いちご アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
(2) 根拠 ・現在の発生は多い(平年比：ほ場率1222%、株率700%)。(+)
・向こう1か月の平均気温は高い見込みで、増殖に適している。(+)
(3) 対策 ・11月までは野外からの飛来が発生の主要因であったが、今後はハウス内での増殖が問題となり、特に2月ごろから顕著な被害が生じる。飛び込みが落ち着いたこの時期に、ハウス内にアザミウマ類が残らないよう、スピノエース顆粒水和剤やアーデント水和剤[ミカキアザミ]などで防除する。
・卵や蛹に対しては防除効果が劣るため、スピノエース顆粒水和剤による防除の約5日前にマッチ乳剤[ミカキアザミ]などのIGR剤を予め散布しておく
・防除効果が高い(宮城県農業・園芸総合研究所資料より)
(4) 備考 ・当センターHPに「アザミウマ類の薬剤感受性検定」を掲載中。

4 トマト 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：平年並
(2) 根拠 ・現在の発生はやや少ない。(-)
・今後、ハウス内が多湿となりやすく、発生に好適な条件となっている。(+)
(3) 対策 ・施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。
・ここ2年は発生が多かったため、咲き終わった花卉や発病果、発病葉は、伝染源となるので早急に取り除き、施設外で処分する。
・防除は予防を基本とし、暖房機を利用したボトキラー水和剤のダクト内投入による防除を行う。なお本剤は発病前からの継続した使用が効果的である。
・発生初期にフルピカフロアブル、サンヨール等を散布する。
(4) 備考 ・暖房機を利用したボトキラー水和剤のダクト内投入は、薬剤等で灰色かび病の発生密度を下げてから行う。

5 トマト 黄化葉巻病 (TYLCV)

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根拠 ・現在の発生は平年並（平年比：ほ場率98%）。(±)
・向こう1か月の平均気温は高い見込みで、媒介虫であるタバココナジラミの増殖に適している。(+)
・現在のコナジラミ類の発生量は平年並（平年比：ほ場率120%）(±)
- (3) 対策 ・タバココナジラミによって媒介されるので、タバココナジラミの防除を行う。
・多くの雑草にタバココナジラミが寄生するため、ほ場内外の雑草を除去する。
・タバココナジラミの発生初期には粘着くん液剤[コナジラミ類]、サンクリスタル乳剤等の物理的防除剤で防除し、既発生ほ場ではアプロードエースフロアブル[コナジラミ類]、コルト顆粒水和剤[コナジラミ類]などをローテーション散布する。
・罹病株は伝染源となるので、見つけ次第抜き取る。抜き取った株は放置せず、土中に埋設するか、ビニル袋などで密封し枯死させてから処分する。

6 には 白斑葉枯病

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根拠 ・現在の発生は多い（平年比：ほ場率231%）。(+)
・向こう1か月の日照は少なく、降水量は多い見込みで、発生に適する。(+)
- (3) 対策 ・施設内が多湿とならないよう、日中に適度な換気を行う。
・捨て刈りした葉は伝染源になるので、施設外へ持ち出し、土中に埋めるなど適切に処分する。
・発生初期にストロビーフロアブル、セイビアーフロアブル20等を散布する。

7 きく ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根拠 ・現在の発生は多い（平年比：ほ場率386%、発生株率941%）。(+)
・向こう1か月の平均気温は高い見込み。(+)
- (3) 対策 ・下葉や葉裏にかけ残しがないように、薬剤を散布する。薬剤のかかり易い生育初期から抑えることで、その後の増加を抑制する。
・葉裏をよく観察し、発生が認められたら、発生初期には気門封鎖系薬剤をスポット散布するか、コロマイト水和剤[ハダニ]、スターマイトフロアブルなどを散布する。

8 その他の病害虫

	現況	発生予想		現況	発生予想
トマト うどんこ病	やや少	平年並	きゅうり 褐斑病	やや多	多
きゅうり べと病	平年並	やや多		多	多
うどんこ病	やや多	多	きく 白さび病	少	やや少

冬期の病害虫防除対策

イネ縞葉枯病、イネ黄萎病

再生稲での発生は次年度の伝染源となるので水田の耕起を早めに行いましょう。また、ヒメトビウンカやツマグロヨコバイ等は水田及びその周辺の雑草で越冬するので、密度を下げるため畦畔等の除草を行いましょう。

1か月予報（予報期間11月12日から12月11日 11月11日気象庁発表）

関東甲信地方の天気は平年と同様に曇りや雨または雪の日が多いでしょう。向こう1か月の平均気温は高い確率50%です。週別の気温は、1週目は平年並または高い確率40%、2週目は平年並みまたは低い確率40%、3～4週目は平年並みまたは高い確率40%です。

	低い（少ない）確率	平年並の確率	高い（多い）確率
気温	10%	40%	50%
降水量	20%	40%	40%
日照時間	40%	40%	20%

詳しくは農業環境指導センター(<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/>)までお問い合わせください。当センター携帯サイト(<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/keitai.htm>)もご利用ください。

Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012

平成23年度 病害虫発生予報 第9号

平成23年12月16日
栃木県農業環境指導センター

**トマト灰色かび病が多く発生していますので、適切な防除をしましょう！
いちご、きくのハダニ類が依然として多く発生しています！**

予想期間 12月下旬～1月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根拠
- ・現在の発生はやや多い(平年比：ほ場率171%、株率200%)。(+)
 - ・向こう1か月の平均気温は平年並、降水量は平年並～多い見込みで、発生にやや適している。(±～+)
 - ・今後、施設内が多湿となりやすく、発生に好適である。(+)
- (3) 対策
- ・ハウス内の低温多湿が発生助長要因となるため、下葉を取り除き風通しを良くするとともに、かん水は必要最小限にとどめる。
 - ・発病果実等は伝染源となるので速やかに取り除き、ハウス外で処分する。
 - ・発生初期にフルピカフロアブル、セイビアーフロアブル20等を散布する。降雨が続いて湿度が高い場合は、ロブラールくん煙剤等の使用も効果的である。
- (4) 備考
- ・灰色かび病は、収穫直前の果実に発病しやすい。

2 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：やや多
- (2) 根拠
- ・現在の発生は平年並(平年比：ほ場率95%、株率110%)。(±)
 - ・向こう1か月の平均気温は平年並の見込み。(±)
 - ・やや軟弱な生育となっている。(+)
- (3) 対策
- ・適正な温度管理や換気、こまめなかん水等を実施する。
 - ・発生を予防するため、硫黄粒剤によるくん煙を行う。
 - ・発生初期にトリフミン水和剤、ダイヤモンド等を葉裏にもよくかかるように散布する。

3 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根拠
- ・現在の発生は多い(平年比：ほ場率232%、株率233%)。(+)
 - ・向こう1か月の平均気温は平年並の見込み。(±)
- (3) 対策
- ・ハダニ類は下葉に多いので、必要に応じて下葉かきを行う。
 - ・発生初期に気門封鎖系薬剤をスポット散布するか、ダニサラバフロアブル等を葉裏にもよくかかるように散布する。
- (4) 備考
- ・天敵導入前には予め防除を行い、ハダニ類の密度を下げておく。防除には、天敵に影響の少ない薬剤を選定する。
 - ・天敵は効果がでるまでに時間がかかるので、葉裏をよく見て定着を確認する。

4 トマト 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根拠
- ・現在の発生は多い(平年比：ほ場率260%、株率450%)。(+)
 - ・向こう1か月の平均気温は平年並、降水量は平年並～多い見込みで、発生にやや適している。(±～+)
 - ・今後、施設内が多湿となりやすく、発生に好適である。(+)
- (3) 対策
- ・ハウス内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。
 - ・咲き終わった花卉や発病果、発病葉は伝染源となるので速やかに取り除き、ハウス外で処分する。
 - ・防除は予防を基本とし、暖房機を利用したボトキラー水和剤のダクト内投入を行う。なお、本剤は発病前からの継続した使用が効果的である。
 - ・発生初期に、ゲッター水和剤、ベルコートフロアブル等を散布する。
- (4) 備考
- ・暖房機を利用したボトキラー水和剤のダクト内投入は、他の薬剤で灰色かび病の発生密度を下げてから行う。

5 トマト 黄化葉巻病

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根 拠
- ・現在の発生はやや多い(平年比：ほ場率 424%、株率 100%)、(+)
 - ・現在のコナジラミ類の発生量は平年並(平年比：ほ場率 98%、株率 24%)、(±)
- (3) 対 策
- ・タバココナジラミの吸汁によって媒介されるので、タバココナジラミの防除を行う。
 - ・罹病株は伝染源となり、タバココナジラミの媒介により周辺ほ場への拡散も懸念されるので、見つけしだい速やかに抜き取り、さらに土中に埋設するか、ビニル袋等で密封し枯死させてから処分する。
 - ・施設内に黄色粘着トラップを設置し、コナジラミ類を捕殺する。
 - ・タバココナジラミの発生が見られる場合は、クリアザールフロアブル、サンマイトフロアブル等を散布する。

6 には 白斑葉枯病

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根 拠
- ・現在の発生量は多い(平年比：ほ場率 191%)、(+)
 - ・向こう1か月の平均気温は平年並、降水量は平年並～多い見込みで、発生にやや適している。(±～+)
- (3) 対 策
- ・施設内が多湿とならないよう、日中に適度な換気を行う。
 - ・発生初期に、アミスター20フロアブル、ポリオキシソルボンA L水溶剤等を散布する。

7 きく ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根 拠
- ・現在の発生量は多い(平年比：ほ場率 256%、株率 525%)、(+)
 - ・向こう1か月の平均気温は平年並の見込み。(±)
- (3) 対 策
- ・下葉や葉裏にかけ残しがないように、薬剤を散布する。薬剤のかかり易い生育初期から抑えることで、その後の増加を抑制する。
 - ・葉裏をよく観察し、発生が認められたら、発生初期には気門封鎖系薬剤をスポット散布するか、ダニサラバフロアブル、マイトコーネフロアブル[ナミダニ]等を散布する。

8 その他の病害虫

		現 況	発生予想			現 況	発生予想
いちご	アザミウマ類	やや多	平年並	きゅうり	アザミウマ類	やや多	平年並
トマト	うどんこ病	やや少	平年並	に ら	ネダニ	多	多
	コナジラミ類	平年並	平年並	き く	アザミウマ類	やや多	平年並

1か月気象予報(予報期間12月10日から1月9日 12月9日気象庁発表)

平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、平年並または低い確率ともに40%です。3～4週目は、平年並の確率40%です。

	低い(少ない)確率	平年並の確率	高い(多い)確率
気 温	30%	50%	20%
降水量	20%	40%	40%
日照時間	40%	40%	20%

NEWS & INFORMATION

県では、植物防疫を目的とするあぜ道等枯れ草の焼却について、次の理由から実施の自粛をお願いしています。

代替防除方法により病害虫の発生を抑制することが可能であり、焼却の必要性が低いこと。

これまでの焼却において、延焼・傷害事故の発生や住民からの苦情が報告されていること。

枯れ草の焼却による放射性物質の飛散を懸念する声が寄せられていること。

病害虫の防除が必要な地域においては、抵抗性品種の作付や育苗箱への薬剤施用、栽培期間中の薬剤散布、除草、秋耕といった通年の防除対策を心がけましょう。

詳しくは農業環境指導センター(<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/>)までお問い合わせください。

当センター携帯サイト(<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/keitai.htm>)もご利用ください。

Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012